



異端作家のアラベスク

中田耕治

Koji Nakada



中田耕治コレクション ③

異端作家のアラベスク
いたんさつか

一九九二年七月三十日 第一版第一刷発行

中田耕治（なかだ・こうじ）

一九二八年、東京生まれ。

明治大学卒業。作家、評論家。女子美術大学教授。

著書『マリリン・モンロー論考』『ルネサンスの肖像』（青弓社）、『ルクレツィア・ボルジア』『メデイチ家の人びと』『おお季節よ城よ』ほか多数。翻訳家としても知られ、アイラ・レヴィン『死の接吻』ほか多数。

著者

中田耕治

編者

澤名恭一郎

発行者

矢野恵二

発行所

青弓社

東京都千代田区飯田橋一―六―三 幸洋ビル

電話〇三―三二六五―八五四八（代）

振替〇〇東京八―八九四五七

印刷所

西日本製版／平河工業社

製本所

大口製本

©Koji Nakada

ISBN4-7872-9065-7

異端作家のアラベスク

中田 耕治
Koji Nakada

青弓社

異端作家のアラベスク●目次

I

小栗虫太郎 ● 9

夢野久作 ● 24

谷 讓次 ● 45

渡辺啓助 ● 52

江戸川乱歩 ● 61

横溝正史 ● 68

日影丈吉 ● 75

II

国枝史郎 ● 87

白井喬二 ● 98

吉川英治 ● 124

III

澁澤龍彦 ● 153

筒井康隆 ● 175

解説——澤名恭一郎 ● 199

ブックデザイン◎本山吉晴

小栗虫太郎

1

少年時代に小栗虫太郎の作品を耽読した時期がある。江戸川乱歩、山中峯太郎を卒業してもう少し高級なものに興味をもちはじめた少年にとって、不意に異次元の世界がひらけた。あくまで通俗小説ながら、文学としての言語、作品の空間だけを唯一のよりどころとして、そこにくりひろげられる悪魔学、ペダントリー、オカルティズムにいろどられた暗黒星雲のような世界が少年の内部にどうして新鮮な共感を喚び起したのだろうか。

いまでも記憶にあざやかなのだが、小栗虫太郎にこだわるあまり、すでに入手しにくくなっていた『改造』を探し出して「夢殿殺人事件」を読んだり、おなじように「紅軍巴蟻を越ゆ」を読みたいばかりに『文藝春秋』（昭和十四年「一九三九年」五月号）を探しまわったりした。これが後年のさまざまな分野での資料を探し求める性癖のあらわれかと思ひ当るのだが、たまたま「夢殿

殺人事件」が発表された『改造』には、読物として長谷川伸の股旅ものが掲載されていて、これも少年の私に、はじめて時代小説というジャンルにひそむ暗い衝撃を教えてくれた作品だったが、どういうわけかその題名も内容もはや記憶に残っていない。

しかし、小栗虫太郎の作品は、そのペダントリー、レトリックに酔い、とくに「法水麟太郎」の論理、ダイアレクト、さらにはダイダクティクスに夢中になり、自分の思考にとり込もうとした。はるか後年、「夢殿殺人事件」や「オフエリア殺し」を読み返したとき、われながら内容をじつに正確に記憶していたことに気がついた。それほど熱心な愛読者だった。

戦時中に小栗虫太郎を読んだのは偶然に過ぎないが、この作家が死と宿命のおそろしいからみあいをつよく非現実の虚構の世界に結晶させる作業をつづけてきたという第一印象は、いまでも変ってはいない。現在の私は、小栗虫太郎の世界を、石川淳の「白描」や、埴谷雄高の「死霊」や、ミステリーとしてはただ一作を世に問いながら沈黙した塔晶夫の「虚無への供物」などとほぼ等質の、といってわるければ、これらの作品群のようにそれぞれ孤立しながら、そのビザルリにおいて、それぞれの位置に微妙な類縁性を感じさせる世界に属しているときえ考える。

「黒死館殺人事件」に代表される小栗虫太郎のミステリーには、その暗澹たる相貌において、いわば一つの黒魔術的な「黙示録」の世界が凝集されているといっている。ただし、小栗虫太郎が黒魔術に関して、どこまで深く理解していたか。彼は占星学、カバラ学について、あるいは悪魔崇拜についてほとんど語っていないのであって、占星術、神智学、神秘主義を三位一体とする蓄

「薇十字的エソテリズムと無縁である以上、私が「黒魔術的な默示録の世界」とこともなげに規定するのはやはり誤りというべきだろう。ここでは、あくまで「異端」の作家といった比喻として述べておく。

「法水麟太郎」は、小栗虫太郎が創造した名探偵だが、彼の精神は、さまざまにむらがり寄せる百科全書的な知識をまさに類推の魔によって支配しようとする秩序、および分類といつてよい。そこには何よりも擬似科学と神秘が彼の思惟にあり、彼の推理はおどろくべき類推の応用、および存在証明の手段と化している。主要なことは「法水麟太郎」にとつて、精神はただ認識の手段だったばかりではなく、デモニッシュな測り知れぬ生の根源にひそむ衝動だった。一つの範疇世界として建てられた、人間の認識手段の合理的な組織を「法水」の精神は火焰となつて燃やした。すべての悪のなかに、彼の血が流れ、それをおのれの精神に変化させた。

それはたとえば「降矢木算哲」を代表とする悪においていちじるしいのではないか、と反問されるかも知れない。しかし、私は、「法水麟太郎」にさえ、偏狭、かつ固陋な狂信家の陰惨、孤独な姿を認めるのである。逆説的にいえば、小栗虫太郎のミステリーは、「法水麟太郎」が悪を企図し、悪を試みたとしたら、かならずそうしたかたちをとるだろうような事件が起る。まわりくどいいいかたで恐縮だが、こういい直してもよい。

彼の事件は、彼がこうであつてほしいという希望にまさに照応している、と。

「オフエリア殺し」で、「法水」はいう。

「ねえそうでしょう。真理は憎悪を生むと云います。そして、虚無と死とは、その強い衝動から一歩も離れ去ることが出来ないものなんです」

ここに虚無と死を見つめた作家、小栗虫太郎の暗い始原衝動がひそみ、またこの作家が、おそらく自我についての、ある理想、または不逞な野望のために生涯を費しつつ、ついに生涯を犠牲にしたと考えるても不当ではない。小栗虫太郎は、私にとっては日本の文学史上、たぐい稀な暗鬱な作家にはかならない。

種村季弘は「黒死館殺人事件」が、小栗虫太郎の全業績のなかでもさながら大伽藍の主塔のように鬱然と聳えたっていることを指摘して、「しかし一方で、虫太郎には、異国趣味的な冒險譚を骨子とする雄大硬骨な伝奇作家としての一面があったことも忘れてはなるまい」という。

私は種村季弘の意見を全面的に尊重するが、同時に、彼が、「人外魔境」などに手を染めたこと、そうした領域でもまさに彼以外の誰にもなし得なかった世界を切りひらきながら、ついに「法水」ものに匹敵する世界を生み出し得ないままに終ったと考える。私はそこに、小栗の作家としての悲劇を見る。

そこで「雄大硬骨な伝奇作家」たる小栗の一面を知るために「成吉思汗の後宮」をとりあげてみよう。私にとっては意味はないのだが、それぞれ掲載された雑誌の発表年月号をあげておく。

海螺斎沿海州先占記

『文藝春秋』昭和十六年（一九四一年）十月号

巴奈馬朋次郎記

『改造』昭和十四年十一月号

極東

『サンデー毎日』昭和十三年十一月号

成吉思汗の後宮

『モダン日本』昭和十三年四月増刊号

新疆

『モダン日本』昭和十四年十月号

紅軍巴蠟を越ゆ

『文藝春秋』昭和十四年五月号

ここに小栗がめざしたものは、エグゾティックな伝奇小説であって、とくに「海螺斎沿海州先占記」などは発表当時から世評が高かった。私が同時代の作家として小栗虫太郎を読むようになったのはこの作品あたりからだ、この作品は、太平洋戦争の前夜といってよい時期に書かれている。

幼いながら私自身の感じでは、この作品は小栗虫太郎の転進と見えた。あるいは転身といってもよい。時代のはげしい緊張は推理作家を屏息させ、時代の悪気流のなかでミステリーの発表も大きく制限されていた。この作品が「ナポレオンの面貌」につづいて書かれたとき、小栗虫太郎の苦渋にみちた転身を思わなかった読者がいたろうか。

苛酷なかたちで言論を統制した軍部や、無謀な戦争にむかって狂奔して行った政治的な悪時代

の気流といった外部の条件だけに責任を押しつけるつもりではない。乱歩の沈黙や、海野十三、甲賀三郎の挫折などを私は思うかべるのだが、これらの作家たちの文学的挫折は悲劇というより悲惨な自己誤認といったほうがふさわしい。小栗虫太郎も、転形期てんけいきの激烈な影響をうけたひとりだった。もとより時代の急迫は、彼ら一人ひとりの運命にかかわるものではなく、その資質、文学的世界の違いを越えて、戦時中の作家たち、とくにユニークな世界を切りひらくとしていた若い作家たちに共通した宿命だった。もっともあの陰惨な時代の記憶がもはや歴史にくり込まれている以上、あくまで小栗虫太郎という作家とその個性という問題に眼をむけることも必要だろう。ただし、芸術家の個性とその作品の間に密接な関係があるなどと自明のことを申し立てるつもりはないが、じつはこの関係はあきらかにされるべくもない。もともと作家、表現者の創造力はじつは捕捉しがたいものであるために、作家と作品の間の対応関係をしらみつぶしに糾明することはむずかしい。しかし、個々の作家とその作品が、どの程度に変化しているかという問題なら批評の領域にゆるされる。

小栗にはおどろくほどの変化があらわれている。あえていえば、「法水麟太郎」を創造したとき、小栗虫太郎はまさに自分のあり得べき可能性を仮想し創造したといつてよい。例をあげれば、もっとも初期の江戸川乱歩に近いといえるのだが、小栗虫太郎の場合は「明智小五郎」を創造した乱歩よりも、はるかに暗鬱で色彩ゆたかな不可視のオーラにつつまれているのであって、さながら劫罰のように自分のつくりあげた小説の人物の軌道のなかで生きなければならなかった。ひ

たすら孤独な夢に生き、おそろしいほど透徹した自我の観念に生きた作家は、おのれの内面にひそむエソテリックな個性と自分のカバラ的な世界を表現の世界に織り込んだ。そのため、彼の小説の主人公たちは、はじめはひどく違う性格をもつて出発しても、小説が進行するにつれて、いつの間にか作家自身の肖像に変化してしまふ。しかし、それは「法水麟太郎」ものだけで終って、それ以後の伝奇小説には、いわばエグゾティシズムという一つの感性上の態度があらわで、「法水」において体现されたおどろくほど緊張した形態をもたない。これは作家としての成熟を示唆するには違いないが、同時に私としてはある苦渋にみちたものをつい想像するのである。ここに、もう一つの系列を置いてみよう。

金字塔四角に飛ぶ

『改造』昭和十二年（一九三七年）九月号

破獄囚「禿げ鬘」

『改造』昭和十二年二月号

皇后の影法師

『文藝春秋』昭和十一年八月号

白夜

『革新』昭和十四年八、九月号

ナポレオンの面貌

『改造』昭和十六年一、二月号

もとよりこれらの作品も、あらためて小栗虫太郎のユニークさを感じさせる。同時に文体上のあきらかな変化も。